

《翻 訳》

フォルカー・ルーラント「ザクセン九月  
騒乱期の3人の重要人物」(I)

松 尾 展 成

編訳者まえがき

フォルカー・ルーラント博士は、19世紀ザクセン史に関する業績を近年活発に発表している。以下では同氏の雑誌論文3編を選んで、訳出する。これら3編は、ザクセン「九月騒乱」期に重要な役割を果たした3人の評伝である。王子ヨハンは3人の中で最も保守的で、「九月騒乱」のために共同統治者に任命された兄(後に国王)フリードリヒ・アウグストを補佐し、兄の死後1854年には国王となった(本訳第1節)。平民の弁護士ベルンハルト・モースドルフは、ドレーズデン市民協会の指導者として1831年に民主的な憲法草案を起草した左派であって、同年4月に逮捕され、獄死した(本訳第2節)。自由主義貴族ベルンハルト・アウグスト・フォン・リンデナウは、1830年に始まる「ザクセン改革」を、閣僚会議議長として主導したが、次第に保守派に対抗できなくなり、1843年には辞任した(本訳第3節)。これら3論文は、同一の時期を対象とした独立論文であるために、叙述に重複するところがある。

著者は1949年に東部ザクセン・ツィッタウ市近郊のザイフヘナースドルフ村に生まれ、70-74年にドレーズデン教育大学で歴史学などを学び、3年間の教員生活の後、77年に母校の助手(近代史)となった。1981年に論文を同

大学に提出して博士号を取得，1987年の論文によって同大学から教授資格を取得し，88年に母校の講師（近代史）に昇格した．連邦共和国による民主共和国の併合，ドイツ再統一後の大学制度改編によって92年にドレースデン教育大学がドレースデン工科大学に統合された後も，後者の講師（近代史）にとどまったが，95年秋から厳しい状況の下にあるようである．著者の研究の今後一層の進展を祈りたい．

原論文には数多くの図版が含まれるけれども，それらは本訳ではすべて省略されている．本訳の各論文の注において，史料と文献は省略形で示される．その完全形は，本訳第3節の後の「引用史料・文献目録」を，また，ザクセン王国の官庁・官職・称号の原綴，国王の在位期間・大臣の在任期間と生没年は，ゲーアハルト・シュミット（拙訳），『近代ザクセン国制史』，九州大学出版会 1995年，付録を参照されたい．著者の業績目録は本訳の最後に掲げられる．

訳文中の〔 〕は編訳者の追加である．原文の誤植は著者に問い合わせ，あるいは，私の判断で補正されている．私のいくつかの疑問に回答された著者に感謝する．訳注のかなり多くは，テュービンゲン大学図書館，ミュンヘンのバイエルン州立図書館，アルテンブルクのリンデナウ博物館などからの回答に基づいている．これらの機関に感謝する．

## 第1節 ザクセン民兵団総司令官としてのヨハン

王家の兄弟であるフリードリヒ・アウグストとヨハンは，生涯を通じて非常に親密であった．

王子フリードリヒ・アウグストよりも4歳しか若くない王子ヨハンには，ザクセン国王となる可能性はほとんど考えられなかった．しかし，彼は，それにもかかわらず，若いころから兄と並んで立ち，さまざまな行政的課題に専心した．それらの課題の中には，彼が引き受ける必要のないものや，彼の

人望を損なうものもあった。とくに、彼は、長官エルンスト・フォン・マントイフェル(Ernst von Manteuffel<sup>1)</sup>)男爵の主宰する枢密財務委員会において、規律に従って、積極的に活動し、それによって、厳しいが、有益である訓練を受けた。マントイフェルは実務面ばかりでなく、政治的にも——明白に保守的な方向で——大きな影響を彼に与えた。

フリードリヒ・アウグストとヨハンにとって1830—31年の革命は転換点となり、2人は国家の重要な地位に就任した。国王アントーンは1830年9月13日に、甥である王子フリードリヒ・アウグストを共同統治者に任命し、その翌日にはヨハンを、特別の権限を与えられた政府委員会の議長に任命したのである。この委員会は1830年11月末まで事実上一切の統治権を行使した。さらにヨハンは、その後の数カ月および数年、身分制議會・邦議會と枢密院(第二次)の憲法委員会で活発に活動し、新設の国家評議会の構成員となり、また、後に司法省と大蔵省となる官庁の職務に対して影響を及ぼした。しかしながら、民兵団、1830—31年の革命に際して成立した、市民による民兵団の総司令官として[1845年まで在任した]ヨハンの役割については、ほとんど知られていない。彼はこの地位に1830年9月23日に国王と共同統治者によって任命された。王子、後の国王ヨハンの生活において軍事的なものは、まったく副次的な意義を持っていたにすぎないので、彼は、彼独特の義務観から、尋常でないこの新しい課題に対処したのである。

19世紀史を考察する場合に、パリの七月革命によって呼び起こされた、1830年から1832年までの革命的飛躍は、特別の注目に値する。なぜなら、この最初の重大な突撃はドイツにおいては同時に、限界を持つとしても、市民革命の最初の試みであったからである。比較的早期の資本主義的社会的対立によって特徴づけられる、当時の行動の中で、民兵団、市民兵団と護民団が初めて重要な役割を演じた<sup>1)</sup>。これらの団体がザクセン王国で最も強力であったのは、偶然ではない。ザクセンはドイツ諸邦の中で、社会的興奮のための素材がとくに累積している邦であった。なぜなら、人口稠密で、産業

の盛んなこの邦では、産業革命が他のドイツ諸邦よりも早くから、そして、強力に開始されていたけれども、農業においては封建的な土地制度がなお支配的であり、歴史的に遅れた権力機構が存続していたからである。1830年夏には、[王家は17世紀末以来カトリックで、一般国民はルター派であったので、] 尖鋭化する宗派間対立が、状況をさらに加熱させた。1830年9月と10月には民衆運動が邦全体を襲った。それが始まったのは、9月2日の大都市ライプツィヒからであり、そこでは9月5日に都市参事会が次のように住民に訴えて、民兵団が結成されることになった。

「我々の都市は危機にある。正直な市民と住民は、前例のないほどに乱された公安と安寧を回復するために、自分ができることを分担する義務を感じている。そのために我々は、全き信頼をもって、秩序を愛するすべての市民とあらゆる階層の住民に対して、提携し、共同して、公共の利益のためにできることを果たすように、呼び掛ける<sup>(2)</sup>」。

数百人が参加を申し出た。旧来の都市参事会と、市政に従来関与していなかった大市民層が妥協して、民兵団が市民の地域的組織としてライプツィヒで成立したのである。この決定は臨時政府委員フォン・カルロヴィッツ (von Carlowitz<sup>[2]</sup>) 男爵によって事後的に承認された。ハインリヒ・ブロックハウス (Heinrich Brockhaus<sup>[3]</sup>) はその日記に、「民兵団は、危機の時期に下層民を管理するために、非常に有効である<sup>(3)</sup>」、と記している。

召集された軍隊が進駐した9月6日夜には、民兵団は市内の公安をすでに回復していた。騒擾が9月9日に首都ドレスデンにも広がり、瞬く間に国家全体を動揺させると、ザクセン政府は、「公安」を維持するために民兵団を結成するかどうか、の問題を突き付けられた<sup>(4)</sup>。

すでに9月5日に陸軍総参謀部の長フォン・ツェルリーニ (von Cerrini) 少将<sup>[4]</sup> は、「最近の出来事が証明するところでは、民衆の騒擾が突発した場合、軍隊の緊急的投入は、人々の気持を静めるよりもむしろ、人々を怒らせることが稀でない」、と判断していた。そのために彼は、「まず民兵団でそれ

〔沈静化〕を試行し、民兵団が役に立たない場合にだけ、その間に準備した軍隊を全力で踏み込ませる<sup>(5)</sup>、ことを提案した。

今や政府と国王もこの提案に従って行動した。オーストリア皇帝フランツ一世宛ての〔王子、〕後の国王フリードリヒ・アウグスト二世の書簡がこれを証明する。「……二つの道が残されているだけである。一つは、最悪の暴力を用いることである。これは、義務に忠実で、準備のできた多数の軍隊を持っている場合には、実行可能であるが、大変残酷な手段であり、悪を根底から矯正することはできず、それが成功しなかった場合には、非常に悲しむべき、外国の援助の必要しか残さない。もう一つは、根拠のある苦情を強力に除去し、正当な要望を叶えることによって、悪を永久に矯正するように試みることである。もちろん、公安が前以て回復していることが、前提である<sup>(6)</sup>」。

フリードリヒ・アウグストはプロイセン皇太子フリードリヒ・ヴィルヘルムに対しては、鎮圧のための軍隊の投入の拒否を、次の注目すべき言葉をもって根拠づけている。「……暴力的な(道——著者)は残酷となり、ひとたび血が流れると、怪蛇には新しい首が生えてくる<sup>(7)</sup>」、と。

この2通の書簡の弁明的性格が考慮されなければならないとしても、七月革命の経験と一般の民衆騒擾に対する恐怖が、決定の際に影響した事実は明白である。そのために、市民武装を、軽率に行なわれた政府の失策と言うパウ・ラインハルトの見解<sup>(8)</sup>には、同意することができない。

ドレスデン駐屯軍の大部分は秋の舎営地にいたために、政府は治安の回復を護民団に頼らなければならなかった。市民武装のこの最初の萌芽形態は、ザクセン軍がナポレオンに味方して、オーストリアに対して戦い、首都から軍隊がいなくなった1809年に、フランスの例に倣って都市防衛のためにドレスデンで創設された<sup>(9)</sup>。護民団は歩兵8中隊と騎兵1中隊、合計850人から構成されていた。それは警察を支援し、駐屯軍が不在あるいは少数である場合に、番兵として立った。護民団は市参事会に所属し、その士官も市参

事会によって任命された。市民権を持つ、22歳から60歳までのすべての男子住民には、入団の義務があった。訓令は代理勤務を認めていた。同じような組織は当時ザクセンの他の都市でも成立したが、1815年以後に解体されるか、都市軍に転換された。それに対して、ドレーズデンの護民団だけは存続し、社会構造的分析が示すように、主として小市民層によって担われる組織となった。なぜなら、富裕な市民の多くは報酬を支払って、代理勤務者を出したからである。そのために、護民団が民衆運動の鎮圧に同意しなかったのは、驚くにあたらない<sup>(10)</sup>。

9月9日の緊急召集に従った護民団員は僅かであり、多くの団員は命令を拒むか、あるいは、みずから市庁舎と警察署の襲撃に積極的に加わった。市内にいた少数の軍隊は、群衆に対抗できずに駆逐され、新市街の兵舎に退却した。

その後、国王アントーンが、甥である王子フリードリヒ・アウグストを議長として、公安と安寧の回復のために設置した臨時政府委員会は、1830年9月10日朝に最初の措置として、新市街の兵舎から、また、市内から慎重に撤退することを、軍隊に命令した。これによって、一般的な大衆騒擾は最も迅速に阻止できる、と考えられたのである。同時に委員会は、ドレーズデンの市民と住民に対して民兵団の結成を呼び掛け、「安寧の回復と、脅かされている公的財産・私有財産の保護」を民兵団に委ねた<sup>(11)</sup>。そのことによって委員会は、市庁舎に集まり、政府委員会への請願書を可決していた、ドレーズデンの有産市民層の代表者の願望に従った。ライブツィヒと異なって、ドレーズデンの民兵団は政府の決定によって創設されたのである。その設置は民衆運動に対する国家の最初の譲歩であった。

〔政府〕委員会の指令に基づいて、9月10日午後白い腕章を付けて中央兵器庫と軍用貯蔵所に出頭した、ドレーズデンのすべての市民と住民は、小銃を受け取った。王子ヨハンが記しているように、「あらゆる階層の住民の結合によって協同の精神が」鼓舞され、民兵団の信頼性が高められるべきで

あった<sup>(12)</sup>。しかし、これは、産業革命がすでに始まっていた〔工業〕地域と比較して、この首都では、成立しつつある資本主義社会の社会的対立がまだ非常に小さかったことを示している。

すでにその日の午後には集合地点の旧市場、新市場と日本宮殿広場で、また、オストラ橋の傍らで、志願者が雑踏する中で、50ないし80人から成る19中隊が結成された。隊員が士官、中隊長、小隊長、曹長と騎兵大尉をみずから選出することを、政府は承認した<sup>(13)</sup>。

〔政府〕委員会は、結成された民兵団の指揮権を、市駐屯軍司令官兼騎兵隊司令官フォン・ガブレンツ (von Gablenz) 将軍<sup>(14)</sup>に与えた。王子ヨハンはこの決定について次のように解説している。「ガブレンツを部隊の指揮官に選任したのは、適切であった。ガブレンツは古参の有能な軍人であり、大胆で抜け目のない人物であった。……初めには彼は非常にうまく対策を講じた。もっとも、しばらくすると、人々は、彼が喜劇を演じていると、気付いたのである」。

ところで、ヨハンは、民兵団の設置に関する〔政府〕委員会の決定を陸軍総参謀部の長から次のように伝えられた。「それが決定された。ガブレンツはラファイエットである<sup>(14)</sup>。民兵団は首都の警察および警衛勤務の一切を引き受けた。なぜなら、政府委員会は、民兵団の結成と同時に、憎まれていたドレスデンの警察官庁を廃止したからである。一人の同時代人は、当時の首都の状況を次のように記述している。「至る所に武装集団が見られた。静止していたり、舗道や家の玄関の叉銃の周りに屯したり、街灯のついた街路であちらこちら行軍していた。包囲された城塞の中にいるように思われた<sup>(15)</sup>」。

民衆運動が一層拡大するにつれて、ドレスデンの例に倣って、多くの都市で民兵団が自由意志によって形成された。例えば、ケムニッツ (9月12日)、パウツェン (9月12日)、ヴルツェン (9月13日)、グローセンハイン (9月13日)、ツィッタウ (9月15日)、エーデラーン (9月20日) である。

それに、アナベルク、ボルナ、デーベルン、レーバウ、エルスニッツ、ピルナ、プラウエン、ライヒェンバッハ、ロホリッツ、シュネーベルク、ヴェールダウとツヴィッカウの諸都市を加えれば、民兵団が自由意志によって1830年11月までに成立した、ザクセンの都市の一覧表は完全なものとなる<sup>(16)</sup>。

その場合、一般に根幹をなしたのは、古くからあった射撃会であった。市民層の武装組織はすでにそこに成立していたのである。

ドレスデン駐在オーストリア公使コロレード（Colloredo）伯爵は9月10日にヴィーンに次のように報告した。「市民軍がすべての権力を掌握している。市民軍は、権力が彼らの手中にあるので、騒擾によってのみ奪い取られると考えられている譲歩を獲得するまでは、権力を放棄しないであろう」。そして、9月12日には彼は次のように報告した。「市民の委員たちはさらに、彼らの要求が満たされるまでは、市民軍は武器を放棄しないと、断言している。彼らがそれに固執する場合に、この決定の実施を妨げるものは、確かに何も無いであろう。すべての権力は彼らの手中にある。彼らはこの3日間に、組織すること、彼ら自身への信頼を得ること、彼らの力を評価することを、許されたのである<sup>(17)</sup>」。

武装した民兵団の存在が「民衆にとってどれほどの担保<sup>(18)</sup>」であったかは、王子ヨハンの次の言葉からも明白である。「この決定（民兵団の創設——著者）は重要であった。なぜなら、一層の改革の方向へ圧迫する力が、これによって世論に与えられたからである<sup>(19)</sup>」。

民兵団の断固とした態度がいかに重要な譲歩を政府に強いたかは、歴史学が従来ほとんど顧慮しなかった、次の事実に示されている。すなわち、王子フリードリヒ・アウグストの共同統治者への任命は、覆面を付けた王位の交替を意味していたが、これは、同王子の即位への要求がドレスデンの民兵団の中で高まった後に初めて、実現したのである<sup>(20)</sup>。

しかしながら、市民層の重要な権力組織が民兵団として成立した事実よりも、小市民的勢力および手工業雇職人と初期賃金労働者もまた武器を手にし

た事実が、公的権力を一層困惑させた。プロイセン代理公使は本国政府に次のように報告した。「いわゆる自発的な市民に兵器庫を軽率にも開放した結果は、それから発生するかもしれない、ただ一つの禍ではない。無償で武器を手に入れたことによって、……無思慮と混乱から利益を得ていた、悪意を抱く多数の人々に対して、懸念が広がった<sup>(21)</sup>」。カスパール・ダーフィト・フリードリヒ (Caspar David Friedrich<sup>(6)</sup>) も9月11日付けの書簡で、「……騒擾を引き起こした者と、治安を現在回復している者とは、多くが同一人物である<sup>(22)</sup>」と書いている。そのために、民兵団は自由主義貴族ベルンハルト・アウグスト・フォン・リンデナウの政府にとっても、絶えざる危険要因であった。今や、民兵団を国家に一層堅く結び付けておくことが、政府の明白な目標となった。そして、有産市民層もそれに完全に同意したのである。

そのための決定的な第一歩は、大市民層がリンデナウ政府の改革方向に完全に旋回した1830年9月末に、すでに開始された。近衛歩兵連隊がドレスデンの駐屯地にはいり、民兵団と協同で警衛勤務に就いた日、すなわち、9月23日に王子ヨハンはザクセン王国の民兵団全体の総司令官に任命された。革命の中で成立した市民軍の頂点に立つ、保守的な王子、これはまさに「革命史における珍奇なもの<sup>(23)</sup>」であった。それは、民兵団を王家に堅く結び付け、独立の政治勢力としてのそれを排除する、という意図を示していた。王子ヨハンの意図は、みずから承認しているように、「一方では民兵団には、純粹に地方的な性格を守らせ、他方ではそれを、可能なかぎり政治組織ではなく、治安維持のための警察的な組織とする<sup>(24)</sup>」ことであった。

国王と共同統治者は、「この国の多くの地域で最近の出来事に際して結成された民兵団が、公安の維持のために果たした、大きな便益を、きわめて満足して認め<sup>(25)</sup>」、これを恒常的な組織に転換することを決意した、と王子ヨハンに伝えた。そのために、同時に王子ヨハンを議長として、ザクセンの一般的な民兵団法案を作成する、民兵団事項組織委員会が創設された。指導的

な軍人とドレースデン民兵団の士官、および、ドレースデンの有産市民層の代表者がその委員となった<sup>(26)</sup>。

1830年11月29日の民兵団訓令<sup>(27)</sup>は、ザクセンの都市の中の住民3,000人以上のすべてに民兵団〔の設置義務〕を拡大した。民兵団の目的は、第2条に述べられているように、「あらゆる階層の住民の榮譽ある結合によって、公安と法的秩序を維持し、公的財産と私有財産を保護する」ことであった。「したがって、民兵団は、公安の維持を委任された人々を、彼らの要請に基づいて、武力で保護し、火災の際には、必要な監視を行ない、騒擾が発生すると、必要な時には、司令部の命令によって、これをすべての武力でもって鎮圧し、事態が緊急であり、常備軍がまったくいない場合には、必要な巡察と捜索を実施し、戦時には暴力行為を阻止すべきである」。

訓令発布と同時に民兵団は、自由意志による組織という性格を失った。21歳から50歳までの、武器を取りうる、すべての市民と自立的住民は、入団を義務付けられた。報酬を支払って代理人を立てることは、禁止された。学生、工場労働者あるいは雇職人は自由意志で民兵団に加入できるが、その場合には、品行方正に関する雇い主あるいは大学当局の証明書と民兵団委員会の同意が必要であった。都市当局の代表者、民兵団の団員と幹部から構成される民兵団委員会が、民兵団の編成と組織的指導のために各都市に創設された。各中隊はその中隊長と小隊長を秘密投票で選出し、これらの幹部は、[民兵団]委員会の提案した3人の中から、司令官を選出した。司令官の任命のためには総司令官の承認が、もちろん必要であった。直接方式と間接方式を組み合わせた、地方幹部の選出は1831年春に初めて実施されたが、これは、自治体の領域における政治的参加を求める市民層の要求に照応していた。

1831年9月までに設置された民兵団の構成に関する概観を与えるものが、第1表である。その場合、ミットヴァイダ、ホーエンシュタインとチョーパウでは、これらの都市の市参事会と市議会が経済的困窮に関して行なった要望に基づいて、民兵団の結成は延期された<sup>(28)</sup>ことが、注意されるべきであ

第1表 ザクセンにおける民兵団の所在地、兵力と武器(1831年9月末)

都 市	人 口 (概数)	総 兵 力	歩 兵 隊	騎 兵 隊	武 器	
					小 銃	刀 剣
1. アナベルク	4,000	560	6	1	392	76
2. アードルフ	2,000	263	4	—	130	118
3. パウツェン	10,000	677	8	—	577	305
4. ボルナ	3,000	295	4	—	251	198
5. ケムニッツ	16,000	1,468	13	—	610	1,038
6. クリミツチャウ	3,200	313	5	—	277	32
7. デーベルン	5,000	450	8	—	40	415
8. ドレースデン	63,800	4,197	35	1	4,290	2,062
9. フランケンベルク	3,500	494	3	—	328	148
10. フライベルク	10,000	633	6	—	541	235
11. グラウヒャウ	5,000	285	4	—	110	19
12. クリマ	3,300	324	4	—	271	166
13. グローセンハイン	4,500	435	4	—	380	139
14. カーメンツ	3,500	325	5	—	268	89
15. ライプツォヒ	33,000	2,280	16	1	2,037	670
16. ライスニヒ	2,500	457	6	—	—	518
17. レーバウ	2,500	272	4	—	271	174
18. レースニッツ	6,000	258	3	—	75	—
19. マイセン	5,000	565	6	—	462	405
20. エーデラーン	3,800	376	6	—	232	150
21. エルスニッツ	3,000	280	4	—	252	22
22. オーシャツ	3,400	449	6	—	334	302
23. ペーニヒ	3,100	324	5	—	257	29
24. ビルナ	4,300	371	4	1	300	252
25. ブラウエン	6,600	715	4	—	375	30
26. ライヒェンバッハ	3,900	471	6	—	—	—
27. ロホリッツ	3,200	347	6	—	106	127
28. シュネーベルク	5,800	678	9	—	328	173
29. ヴァルデンプルク	3,000	151	2	—	152	83
30. ヴァルトハイム	2,000	258	4	—	134	48
31. ヴェールダウ	3,500	306	4	—	104	20
32. ヴルツェン	3,000	279	4	—	229	174
33. ツィッタウ	8,500	778	8	—	686	—
34. ツヴィッカウ	5,000	438	4	1	359	159
合 計	242,900	20,772	220	5	15,158	8,366

(Vgl. STAD, Nachlaß Johann, Nr. 8 B. 1830-31年のドレースデンにおける護民団・民兵団の事情に関する書類.)

る。他方では、それよりも小規模ないくつかの都市が民兵団の創設を申請し、承認された<sup>(29)</sup>。

最高司令官庁として、王子ヨハンの指揮する最高司令部がドレスデンに創設され、これは1831年12月1日以後は、新設の内務省に所属した。これによって民兵団は、市民的・立憲的統治体制の方向への慎ましい第一歩を歩み始めた国家の権力機構に、堅く統合された。民兵団訓令を補完するものが、同じように王子ヨハンの主導の下で1831年2月5日に成立した懲罰訓令<sup>(30)</sup>であった。

勤務規則違反、すなわち、勤務の拒絶ないし不履行から、委託された、あるいは、自分の、職務上必要な武器と用具の、規定に反する携帯と取り扱いに至る違反、に対しては、罰金と名誉剥脱、あるいは、民兵団からの排除が定められ<sup>(31)</sup>、後者は1832年から市民権の喪失と結び付けられた。政府が民兵団訓令によって追求した意図は、王子ヨハンの手稿文書から明らかになる。彼は次のように記している。「富裕な市民と教養階級の住民は法的な関与を義務付けられた」ので、人々は、「市民層と住民層の花を含む、このような構成の軍隊は、扇動者の試みを一般に阻み、自分の利害によって使命を感じるであろう、という確信、そして、このような民兵団が弱さから扇動者に怯んだり、現実の暴動に導いたりすることは、少なくとも恐れなくてよい、という確信から出発して<sup>(32)</sup>」いる。

穏健自由主義的な改革に対する、自由主義的貴族層と有産市民層との共同の利害に基づいて、一武装組織が形成されるべきであった。これは狭義の「市民兵」ではなく、したがって、市民権を持つ住民だけを含んでいたのではない。しかし、それは富裕な市民層のために、主として、差し迫った民衆騒擾の抑圧に役立つべきであった。市民権を持たない住民を「具合良く添加した」混合によって、その攻撃力の向上が図られたばかりでなく、同時に、都市の市民と庇護民の間の緊張が取り除かれるべきであった。さらに、民兵団は「協同の精神の促進」に役立つべきであった。民兵団における共同

の勤務が、徐々に鮮明になりつつある、市民社会内部の社会的対立を調停すること、住民の中の「良い考えを持った」部分を政府の政策に堅く結び付けることが期待されていた。しかし、同時に、民兵団の存在は客観的には、ザクセン王国においても国家と社会の市民的変革の過程を開始する諸改革に反対する保守派貴族層の抵抗を麻痺させるための、一定の支柱であった。ライプツィヒ民兵団の衛兵の歌はこの状況を明白に示している。

「民兵団は  
 有益ことだけをやり、  
 賤民の狂気の沙汰も、  
 専制行為もやらない<sup>(33)</sup>」。

民兵団は差し当たりは、至る所で民衆の圧力のために廃止された警察の機能を代替したばかりでなく、1830年9月から1831年4月までは、軍隊の国内向け機能をも広範に引き受けた。1831年4月の騒擾までは、公安の維持と回復のためには、ほとんど専ら民兵団が用いられ、軍隊は予備隊として背景に退いていたのである。

[1830年] 民兵団訓令の公布の数日後に、政治的状況を著しく激化させる出来事がドレスデンで発生した。民兵団への入団義務の布告とともに政府は、ドレスデンになお残っている護民団を解散させた。護民団は、それが九月騒擾の阻止を拒絶したために、国王、政府と有産市民層に忌避されたのである。オストラ公園における1830年12月4日の最後の召集に際して、護民団員550人は武器引渡しの命令を拒否し、解散の決定に対して声高に抗議した<sup>(34)</sup>。行進の際に楽団が何度もマルセイエーズを演奏した事実が、この示威運動の政治的性格を証明していた。これに対して政府は仮借なく対処した。[しかしながら、] その後に行なわれた取り調べにおける、反抗的団員に対する一層の処置に関する問題では、政府内部で明らかに激しい対立が生じた。

事態の一層の切迫を避けるために、民衆運動とかつての護民団員に対する可能なかぎり慎重な政策を擁護したリンデナウは、自分の辞任の通告という

犠牲を払って初めて、政府内部では共同統治者に対して、意志を貫くことができた。かつてライプツィヒ大学に学んだ後、法制史家となったロベルト・カルル・ザクセ（Robert Karl Sachse<sup>[7]</sup>）は、当時の世論を特徴づけて、1830年12月31日に次のように書いている。「自由の主要な擁護者である大臣フォン・リンデナウは、非常な難事業として、政府と闘わなければならず、一度は辞任しようとした。この道を取るように誰かが彼に忠告しないことを、私は望んでいた。民衆は王子〔共同統治者〕よりも彼に一層好意を持っていた、と私は信じている<sup>(35)</sup>」。

事件関係者全員は、民兵団の勤務に適さないと宣告され、名誉裁判所に提訴された。もともと小市民を主体としていた護民団は、今や不満の潜在的な砦となった。その中から1830年12月にドレーズデン市民協会<sup>(36)</sup>が生まれた。それは最初は護民団の存続だけを目標としていたが、間もなく都市のさまざまな問題にも関心を示すようになった。革命的な学生組合運動に参加したことのある、ドレーズデンの弁護士ベルンハルト・モースドルフの影響の下で、市民協会は遂に、リンデナウの国家改革に対する革命的＝民主主義的な対案を宣伝する政治結社に転化した。1831年春に約2,000人の会員を持っていた市民協会は、首都における重要な政治勢力であった<sup>(37)</sup>。

その綱領をなすのは、モースドルフが起草した憲法草案、『ザクセン国民の希望する憲法』であり、その冒頭には、「それが与えられなければ、我々は小銃の床尾で叩く<sup>(38)</sup>」、という標語が掲げられていた。草案の中でモースドルフは、すべての権力が国民から発し、封建制が根絶され、市民的＝民主主義的な権利と自由が完全に支配している立憲王制を素描した<sup>(39)</sup>。この革命的な綱領を実現するための、最も重要な勢力としてモースドルフは民兵団を考えた。そのために彼は、この組織を革命的な民衆闘争の機関に転化することを、優先目標とした。恐らくモースドルフが起草し、1831年3月に市民協会によって配布された、無署名の小冊子、『民兵団の現在と、あるべき姿<sup>(40)</sup>』がこれを証明している。

王子ヨハンは1831年2月27日にプロイセン皇太子に次のように書き送っている。「邪悪な考えの者は、一步も退こうとはしない。事態を厳正に処理するために、あらゆる処置が準備された。……民兵団が信用できると証明することを、私も望んでいる。その精神に影響を及ぼすように、少なくとも私は義務を果たす<sup>(41)</sup>」。

王子ヨハンの見解に関して首都の民兵団の試金石となったのは、ドレーسدンの1831年四月騒擾に対するその対応であった。

リンデナウ政府が4月17—18日にその全権力装置を投入して、市民協会を粉碎した時<sup>(42)</sup>、ドレーسدンの民兵団はさまざまな懲戒の試みにもかかわらず、抑圧の機関としてはそれほど信頼できないものと証明された。4月17日に逮捕された市民協会指導者2人を、留置場から武力で解放しようとする動きは、協会員15人によるものであって、彼らは民兵団員でもあった。その指揮を取ったのは、第13中隊の小隊長である轆轤工親方ヘルマンであった。民兵団の警報発令に際して団員4,107人の中で、規定の場所に集合したのは2,441人にすぎず<sup>(43)</sup>、これらの団員も「反抗的で、騒擾的<sup>(44)</sup>」であった。彼らの一部は命令に従わなかった。なぜなら、同時代人フリードリヒ・ヴィルヘルム・シュトッレ (Friedrich Wilhelm Stolle<sup>[8]</sup>) が述べているように、彼らは「市民と闘うことを望まなかった<sup>(45)</sup>」からである。政府が信頼して頼ることができたのは、民兵団の中の、有産市民層が支配的で、政府に忠誠である、いくつかの部隊だけである。1830年9月以来初めて、強力な軍隊が大量に投入された。そして、政府の路線に対する敵対を打倒するために、射撃命令さえも初めて下された。

これを想起して、王子ヨハンは日記の中に次の言葉を記している。「……私は騎馬大隊(民兵団騎兵——著者)とともに、軍隊が整列している旧市場に行った。しかし、賤民もここに突進しようとしたので、それに対して、フォン・ダルヴィッツ (von Dallwitz) 大佐<sup>[9]</sup>の指揮する親衛連隊の1大隊が、バーダー小路の端まで対抗し、石や角材がそこから投げつけられたの

で、激しい一斉射撃を行なった。暗黒の小路から沸き上がる苦しみのは、無気味な印象を与えたが、私は、私自身が行なった、この措置の必要性を認識していた。あたりは静かとなり、私は帰館した<sup>(46)</sup>。

民兵団のかなりの部分が民衆運動の抑圧を拒絶したことは、支配層を非常に憂慮させた。ドレーズデン市駐屯軍司令官フォン・ガブレンツ將軍は4月25日に、王子ヨハンに対して事態を次のように評価した。「この数日に起こった出来事に際して、民兵団の大部分の挙動はきわめて曖昧である。そして、妨害されずになおも存続している市民協会が、民兵団、とくに、かつての護民団から、多くの者を、危険な事項に関して背教者として獲得したことは、紛れもない」。彼の要請は次のとおりであった。「それ故に、慎重に、かつ、限りなく力を尽くして実施される措置によって、この組織を、その目的に適合した状態に転換することが、最も重要である。なぜなら、そのような組織だけが、確実に頼りにできるものであり、逆の場合にはそれはきわめて危険であるからである<sup>(47)</sup>」。

多くの外交官も、本国政府の命により、民兵団を速やかに、少なくともその一部分を、武装解除するように、ザクセン政府に要請した。ベルリン駐在ザクセン公使フォン・ヴァッツドルフ (von Watzdorf) 將軍<sup>[10]</sup>は4月21日の至急便で次のように記した。「民兵団の一部は……疑いもなく、然るべき審査を必要としている<sup>(48)</sup>」。[ドイツ]連盟議会のザクセン代表である[エルンスト・フォン・]マントイフェルは、フランクフルト・アム・マインの意見を伝えて、「民兵団の精神を一層良い方向に正すこと<sup>(49)</sup>」を要求した。

ドレーズデン駐在プロイセン公使フォン・ヨルダン (von Jordan) 男爵は民兵団の廃止を要求した。「なぜなら、8千の小銃を多数の疑わしい人々に残しておくことは、危険であるからである<sup>(50)</sup>」。オーストリア公使コロレード伯爵はヴェーンに次のように報告した。政府が、勤務していない中隊から武器を返還させることが、緊急に必要である。民兵団が「現在のように構成されており、その大部分が低劣な精神を吹き込まれている」かぎり、「政府は

公安をもたらすことも、それを保つこともできないであろう<sup>(51)</sup>。

今やドレースデンの民兵団において大規模な追放が始まった。すでに4月27日までに、「反抗したり、勤務を怠った」団員711人の中の436人が武装解除され、排除された<sup>(52)</sup>。ついに、王子ヨハンが1831年5月8日に発布した総司令部指令によって、4月17—18日の違反に関して取り調べられた民兵団員は全員が、追放された<sup>(53)</sup>。さらに政府は、ドレースデンの4月の事件を利用して、全国ですべての手工業雇職人と賃金労働者、および、「反抗的な者」を民兵団から放逐した。合計して4,500人の団員が、ドレースデン民兵団からは1,200人が罷免されたのである<sup>(54)</sup>。

ドレースデンのいくつかの中隊では、第2表が示すように、追放された者は団員の半数を越えた<sup>(55)</sup>。

民兵団の一層の規律強化のために6月16日に、規律訓令への補充令が発布され、些細な規律違反をも厳重に処罰した<sup>(56)</sup>。しかし、民兵団に対する保守的貴族層の不信は払拭されなかった。なぜなら、[1831年]8月末にライブツィヒで、1830—31年のザクセンの騒擾の最後の余韻として民兵団が再び騒擾を計画したからである<sup>(57)</sup>。

そのために、ザクセン国家の支配中枢部において民兵団の将来が考慮された。その内容は共同統治者と彼の弟ヨハンの手稿文書に詳細に示されている。多くの保守派貴族が歓迎したであろう、民兵団の解散は、政治的な考慮からして、時期的に適切でなかった。なぜなら、民兵団に対する断固とした攻撃は、押さえ付けたばかりの革命的運動をふたたび燃え上がらせる危険を孕んでいたからである。さらに、民兵団関係の法令は、リンデナウの穩健自由主義的で複合的な改革作業の重要な一要素であった。もちろん、共同統治者が覚書で述べているように、「民兵団によって一定の軍事的なまとまり、秩序と訓練が民衆に与えられ」、それによって、「万一の場合には国家にとって危険が増大する<sup>(58)</sup>」ことが、懸念された。そのために、王子ヨハンは、民兵団に原則的には手を触れないこと、しかし、「継続的な勤務」を廃止し、民

第2表 1831年のドレーズデン民兵団の現員——四月騷擾以前と9月の比較

地域	都市区分	中隊	4月前半	9月
I	旧市街	第1	141	104
		第4	103	40
		第6	121	87
		第14	106	44
		第22	91	41
		第23	101	46
II	旧市街	第2	82	33
		第5	128	109
		第11	145	141
		第13	115	70
		第24	113	87
		第25	105	82
		第26	103	61
		第27	90	57
		第28	73	22
		III	ピルナ郊外市	第3
第7	140			107
第29	117			83
第30	81			81
IV	ゼー郊外市	第8	124	111
		第15	109	82
		第31	101	66
		第32	104	63
V	ヴィルスドゥルッフ郊外市	第10	115	92
		第12	95	59
		第33	109	72
		第34	83	27
VI	フリードリヒ市区	第17	171	132
		第35	155	121
VII	新市街	第9	139	127
		第16	148	133
VIII	新市街	第19	110	90
		第20	116	82
IX	新開地	第18	138	104
		第21	146	115
		騎兵中隊	116	105
合計		36中隊と1騎兵中隊	4,199	2,996

(STAD, HA Johann, Nr. 49 b. 先月8日の総司令部指令によってドレーズデン民兵団から失われた兵員の一覧表, 1831年6月24日付け.)

兵団を「単に警察的な制度であり、例外的な事情と時期のための予備である」と見なして<sup>(59)</sup>、その公的な役割と影響力を抑制することを、必要と考えたのである。

まさにこの意味において、民兵団は1848年の革命までの期間に一種の補助警察に、行進と祝祭の際の市民の代表組織に発展し、市民層と政府の間の仲介者としての機能を果たした。しかし、ザクセンでは民兵団が1830—31年の革命終結後も廃止されなかった事実は、重大な意味を持っている。なぜなら、都市市民層の十分に組織された武装組織が存続し、市民の自信の強化に少なからず寄与したからである。

(注)

- (1) Vgl. Ruhland 1987.
- (2) STAD, KrA, Nr. 4185. ザクセンにおける暴動とそれに対する措置, 1830年. ページ数なし.
- (3) Brockhaus 1884, S. 165.
- (4) Vgl. Ruhland 1990, S. 39-44.
- (5) STAD, KrA, Nr. 4188. ザクセンにおける暴動とそれに対する措置, 1830-31年 (1830年11月11日付けの『メルクル』, 第115号を含む.).
- (6) STAD, Nachlaß August, Nr. 103. 1830年10月14日付け書簡.
- (7) STAD, Nachlaß August, Nr. 114. 1830年12月30日付け書簡.
- (8) Vgl. Reinhardt 1916, S. 148.
- (9) ドレスデンの護民団については Vgl. STAD, KrA, Nr. 6569-6611; Stadtarchiv Dresden, Nr. 63; ———, Nr. 71.
- (10) Vgl. Ruhland 1989, S. 225-229; STAD, KrA, Nr. 6593. 民兵団・護民団・市民兵団の総員名簿と補足, 1825-30年.
- (11) STAD, GK, Loc. 2431. 民兵団の組織, 1830年.
- (12) STAD, Nachlaß August, Nr. 35 r. 民兵団に関する王子の1830年の記録.
- (13) STA-AS Altenburg, FA Lindenau, Nr. 21. ドレスデンで1830年9月10日に結成された民兵団19中隊の中隊長は、次のとおりであった。第1＝侍従フォン・ケネリッツ (von Könnertitz), 第2＝毛皮加工業親方ブーレ (Buhle), 第3＝財務顧問官フォン・ベルレプシュ (v. Berlepsch), 第4＝財務顧問官フォン・フリーゼン (v. Friesen), 第5＝管理人クドレ (Coudray), 第6＝中尉フォン・ロイター (v. Reutter), 第7＝石版画家リヴィエ (Rivier), 第8＝博士ルブラック (Rublack), 第9＝大尉フォ

ン・マンデルスロー (v. Mandelsloh), 第10=弁護士ハッバート (Habbert), 第11=侍従フォン・プレッツ (v. Plötz), 第12=中尉フォン・ゲルビンク (v. Gerbing), 第13=針製造工親方シュミット, 第14=商人マーニトゥス (Manitus), 第15=弁護士ザイファート (Seyffert), 第16=大尉クンツ (Kunz), 第17=大尉クマー (Kummer), 第18=大尉メーヴェス (Mewes), 第19=クロイツ学校校長バウムガルテン=クルージュス (Baumgarten-Crusius).

- (14) Johann 1958, S. 99.  
 (15) Nostitz<sup>[11]</sup> 1832, S. 7 f.  
 (16) Vgl. STAD, GK, Loc. 2431.  
 (17) STA Wien, Nr. 72. 1830年9月10日付け, および, 1830年9月12日付け報告.  
 (18) Studentenbriefe 1898, S. 357.  
 (19) Johann 1958, S. 99.  
 (20) Vgl. STAD, GK, Loc. 13544. 1830年の王子フリードリヒ・アウグストの共同統治者昇格に関する元国家大臣 [ユーリウス・トラウゴット・ヤコブ・] フォン・ケネリッツの文書.  
 (21) STA-DS Merseburg, MdA, Nr. 3842. 1830年9月13日付け報告.  
 (22) グライフスヴァルト居住の兄弟たち宛て C.D. フリードリヒの1830年9月11日付け書簡, in: Friedrich 1968, S. 60.  
 (23) Huber 1960, S. 80.  
 (24) Johann 1958, S. 110.  
 (25) STAD, GK, Loc. 2431.  
 (26) Vgl. STAD, GK, Loc. 2431.  
 (27) Vgl. STAD, KrA, Nr. 4048 (1830年11月29日の民兵団訓令を含む.).  
 (28) Vgl. STAD, MdI, Nr. 1010. 民兵団の果たすべき勤務.  
 (29) Vgl. STAD, MdI, Nr. 992. 民兵団制度に関する法律の改正.  
 (30) Vgl. STAD, MdI, Nr. 994. 民兵団に関する法律の注釈.  
 (31) Vgl. STAD, MdI, Nr. 1013. 民兵団の刑事問題における権限関係.  
 (32) STAD, Nachlaß August, Nr. 35 r.  
 (33) STAD, Nachlaß Johann, Nr. 7 E. 民兵団の設立に対する祝祭歌.  
 (34) Vgl. STAD, GK, Loc. 2259. ドレスデン護民団の解散に関する文書, 1830-31年; STAD, Nachlaß Johann, Nr. 7 D. 護民団の解散の際の暴動に関するドレスデン市駐屯軍司令官兼民兵団司令官フォン・ガブレンツの1830年12月4日付け告示; STAD, OLG, Nr. 306 u. 307. ドレスデン護民団の解散命令の発布に際して1830年12月4日に発生した騒乱に関する調査文書.  
 (35) Studentenbriefe 1898, S. 358.  
 (36) Vgl. Ruhland 1983 (a), S. 47 ff.  
 (37) Vgl. STAD, Nachlaß Schreibershofen<sup>[12]</sup>.  
 (38) STAD, OLG, Nr. 134. 弁護士モースドルフの押収書類, 1831年 (『ザクセン国民の希望する憲法』を数部含む.).

- (39) Vgl. Ruhland 1983 (b), S. 45 ff.  
 (40) STAD, OLG, Nr. 138. 民兵団の現状と、あるべき姿。  
 (41) Briefwechsel 1911, S. 289.  
 (42) Vgl. Ruhland 1983 (c), S. 16 ff.  
 (43) STAD, HA Johann, Nr. 4 a. 1831年4月17-18日の出来事に関するドレースデン市駐屯軍司令官の覚書。  
 (44) 同上。  
 (45) Stolle 1835, S. 103 f.  
 (46) Johann 1958, S. 117.  
 (47) STAD, HA Johann, Nr. 4 a. ドレースデン四月騒擾の期間における民兵団の成績に関する、駐屯軍司令官の1831年4月25日付け覚書。  
 (48) STAD, GS-Berlin, Nr. 132, Bl. 44 a.  
 (49) STAD, HA Johann, Nr. 151 a. エルンスト・フォン・マントイフェルとの往復書簡, Bl. 132 f.  
 (50) STA-DS Merseburg, SGS, Nr. 3841. 1831年4月21日の報告。  
 (51) STA Wien, Nr. 64. 1831年4月19日の報告。  
 (52) STAD, HA Johann, Nr. 49 b. 1831年4月27日までに武装解除され、中隊から排除された民兵団員の一覧表。  
 (53) Vgl. STAD, MdI, Nr. 1000. 民兵団総司令部関係。  
 (54) Vgl. STAD, HA Johann, Nr. 8 L. 王国内各地の民兵団の事情に関する書類。  
 (55) STAD, HA Johann, Nr. 49 b. 先月8日の総司令部指令によってドレースデン民兵団から失われた兵員の一覧表, 1831年6月24日付け。  
 (56) Vgl. STAD, MdI, Nr. 993 a. 民兵団全般の組織と事情。  
 (57) Vgl. STAD, MdI, Nr. 991. 解散させられたライプツィヒ民兵団第6中隊; STAD, OLG, Nr. 308 bis 324. 1831年8月のライプツィヒ騒乱に関する調査委員会の調査文書。  
 (58) STAD, Nachlaß August, Nr. 35 r.  
 (59) STAD, HA Johann, Nr. 8 L.

(訳注)

- [1] マントイフェル (1765-1841).  
 [2] 後の内務大臣ハンス・ゲオルク・フォン・カルロヴィッツ (1772-1840).  
 [3] ブロックハウスは出版業者 (1804-74).  
 [4] クレメンス・フランツィスクス・クサーヴァー・フォン・ツェルリーニ (1785-1852). 1831年10月からは中将・陸軍総司令官。  
 [5] ハインリヒ・アドルフ・フォン・ガブレンツ中将 (1764-1843).  
 [6] フリードリヒは画家 (1774-1840).  
 [7] ザクセはハイデルベルク大学教授 (1804-59).  
 [8] これは文筆家フェルディナント・シュットレ (1806-72) であるかもしれない。

- [9] 1830年に大佐となったヨハン・ティモテウス・マクシミリアーン・フォン・ダルヴィッツ (1775-1852).
- [10] カルル・フォン・ヴァッツドルフは軍人 (中将)・外交官 (1759-1840).
- [11] 生没年不明の著者の名はハンス・カルル・フリードリヒ.
- [12] 1829年に少将, 43年に中将となったマクシミリアーン・フォン・シュライバースホーフエン (1785-1881).

## 第2節 ベルンハルト・モースドルフ (1802—1833). 学生組合会員から民主主義者へ.

一人の人間の生涯と業績を辿り、それによって、歴史における生き生きしたものを発見することは、常に魅惑的である。過去を具体的に認識することは、一人の個人がその時代の、客観的に与えられた社会的使命をどのように引き受けたか、どのような反発と困難が生じたか、それと同時に、その人物が、主体的な特性を持つとしても、ある社会層の代表者として時代の課題と未来の要求にどのように応じたか、でもって、その人物の偉大さと限界を測ることである。

1831年3月1日に、これが最後のものとなる、ザクセン王国の末期封建的な身分制議会がドレーズデンに召集された。その主要課題はブルジョア的な憲法の採択であった。そのために、二つの草案、すなわち、保守的なヴェルテンベルク憲法に従った、ハンス・ゲオルク・フォン・カルロヴィッツ男爵〔後の内務大臣〕の穏健〔保守的〕な草案と、バーデンの憲法を模範とする、内局大臣ベルンハルト・アウグスト・フォン・リンデナウの自由主義的な草案が、議会に提出された。それと同時に、急進民主主義的な憲法草案が非合法的に出版された。それは、ドレーズデンの29歳の弁護士ベルンハルト・モースドルフが執筆したものであった。

以下においては、生涯の間に、学生組合の思想に強く影響された後、小規模国家ザクセンにおける1830—31年の革命の時期には、ドレーズデン市民協会の中心となり、民主主義的反対運動の指導者となった、一人の人物の活動

が略述される。

ヴィーン会議の審議と、ザクセンにとって非常に厳しい、その帰結〔＝領土の半分以下への縮小〕という苛酷な経験を経て、ザクセン政府は広範な自主的外交政策を放棄しなければならなかった。ザクセンは、オーストリアによって実質的に規定される、ドイツ連盟の発展に組み入れられた。国内では、デトレフ・フォン・アインジューデル伯爵の政府はメッテルニヒの復古的性格の政策を遂行した。すべての措置は、あらゆる社会的な変化を最初から一切拒否し、安寧の維持と現状へのはなはだしい固執を目指した、きわめて保守的な国家観によって刻印されていた。それに反対する勢力は、抑圧され、政治的に孤立させられた<sup>(1)</sup>。これはザクセンでは学生組合の運動にも当てはまった。この運動の中では、国民的統一とブルジョア的発展への期待が満たされないことに対して、失望が表明されていた。この思想の中には、中世的な皇帝主権の観念が、正義と自由の国への漠然とした指向と交錯し、ジャコバンの忿懣が暴君殺害の観念と交錯し、主情的でキリスト教的な愛国主義が偏狭なドイツ至上主義と結び付いていた。

ヴィッテンベルク大学がプロイセンのものとなった1815年以後、ザクセン王国にただ一つ残された邦立大学であるライプツィヒ大学では、イエーナの例に倣って、学生組合の運動が盛り上がった。ライプツィヒ大学のいくつもの同郷人会に所属する学生は、1817年10月18日のヴァルトブルク祭に参加し、1年後にはライプツィヒ学生組合が結成された。1819年9月20日のドイツ連盟議会でカルルスバード決議が満場一致で可決された後、ライプツィヒの学生組合は他の大学のそれと同じように、厳しく抑圧され、迫害された。アインジューデル政府はこの決議を、1819年11月13日の訓令によってザクセン王国に発効させたのである<sup>(2)</sup>。カルルスバード決議は、相互補完的な、さまざまな法律をまとめたものであって、大学に対する国家の監視と学生組合の禁止を規定した大学法、新聞・雑誌・全紙〔16ページ〕20枚以上のすべての印刷物に対する検閲の導入を内容とする出版法、ドイツ連盟臨時中央審査委

員会（マインツ）への参加から生じた審査法，ドイツの個別邦の国内問題への軍事的介入を定めた強制執行法から，成り立っていた。ブルジョア的发展を抑止しようとする封建的官憲のこの試みと，相対的な無風状態にもかかわらず，その後，諸大学に学生組合的な秘密結社が結成された。それらはイタリアのカルボナリ（Carbonari<sup>[1]</sup>）の秘密結社と同じように，スペイン，フランスおよびイタリアにおける革命運動の影響を受け，カルル・フォルン（Karl Follen<sup>[2]</sup>）の思想を支持していた。これらの秘密結社は1821年に「青年同盟」を結成した<sup>[3]</sup>。大学生，若い大学人とエルフルトの守備隊の数人の士官<sup>[4]</sup>から構成されるこの同盟は，ドイツ全体に対する代議制的憲法の承認が，いま統治している諸侯と封建貴族からはもはや期待されないと，確信していた。同盟の見方によれば，現存の社会諸関係の暴力的な転覆の他に道はなく，青年同盟はそのための原動力を与えるべきであった。ライプツィヒ大学にも同盟の支持者が現れた。彼らはとくに同郷人会「モンダネア」に集中していた。青年同盟の構成員は宣誓によって，密告は死をもって罰すると確認していたけれども，「青年同盟」はすでに1824年には密告され，反動派によって粉碎された。多くの同盟構成員は，アルノルト・ルーゲ<sup>[5]</sup>のように，禁固刑，一部は15年，に処せられた。青年同盟に所属し，基本的にあの思想に影響されていたライプツィヒの学生の一人が，法学部学生ベルンハルト・モースドルフであった<sup>[6]</sup>。

ベルンハルト・モースドルフは1802年1月6日に，政府の書記官フリードリヒ・モースドルフの子としてドレスデンの新市街に生まれた。どの首都にも数多くいる下級官吏層の小市民的環境の中で成長した彼に，彼の父親は，息子が一層上級の官吏への道を歩むことを，密かに希望して，特別な教育の機会を与えた。

まずモースドルフはドレスデンの有名な〔私立〕ゼミンク学校（Semmingsches Bildungsinstitut）にはいり，15歳でマイセン市の王立聖アフラ学校<sup>[3]</sup>に移った。天賦の才を持つ，この青年は1813-14年の〔対ナポレオン〕

独立戦争を経験し、両親の家でジャコバンの思想に触れた。なぜなら、父の兄弟の一人がパリのジャコバン・クラブの会員で、フランス革命に積極的に参加していたからである。この思想と時代の出来事に影響されて、真理を愛する若いモースドルフは、王立学校の忠義で保守的な教師たちと衝突し、卒業試験の半年前に学校を去らなければならなかった。彼は、父親の助力によってドレスデンのクロイツ学校<sup>[4]</sup>で特別試験を受け、1819年夏にライプツィヒ大学法学部から入学を許可された。

反動的で激しい抑圧の時代に——ヴァルトブルク祭が行なわれたのは2年前であり、「扇動的・革命的策謀」に対するカルルスバード決議は丁度発布され、折悪しくも彼の父親がザクセン王国に関するその訓令に副署していた。——学生モースドルフは学生組合運動に参加した。彼は同郷人会「モンダネア」に加入した。

市民的自由と国民的統一を求めるヴァルトブルク祭の思想に鼓舞されて、モースドルフは、ギリシア独立運動の積極的援助を求める青年同盟の要請に従い、外国＝トルコの支配に反対するギリシア国民の闘争に参加した。ギリシアの国民的独立運動は、ドイツの市民層にとって、古典古代文明の遺産を救護するための闘争でもあった。このギリシア愛好主義は、著名な哲学者、神学者で、ライプツィヒ大学の学長でもあったヴィルヘルム・トラウゴット・クルーク (Wilhelm Traugott Krug<sup>[5]</sup>) をその最初の、そして、指導的な代表者としており、ザクセンでもギリシア独立戦争の支援のために世論を動かした。

1821年春にモースドルフは勉学を中断し、バルカン半島のヤジ市 (Jasi) [ルーマニア] に急行し、アレクサンドロス・イプシランティ (Alexandros Ypsilanti) 侯<sup>[6]</sup>の司令部にはいった。彼は特設ドイツ軍団の将校に任命された。モースドルフは勇敢に戦ったが、1821年6月19日にイプシランティ侯はルーマニアのドラガザーニ市 (Dragasani) の戦闘で手痛い敗北を喫した。しかし、1822年1月1日にはモースドルフはギリシア国民の独立宣言と憲法の

発布を現地ギリシアで経験した。

モースドルフは、友人たちから「ギリシアの海軍士官<sup>[7]</sup>」と呼ばれていたが、バルカン半島の出来事に対する彼の具体的な関与については、死の瞬間まで黙して語らなかった。これに関する根本史料は存在しないので、彼の生涯のこの重要な一時期は永遠に過去の闇の中にある。産業革命が進行しはじめた結果として必要となった社会的変化への思想的準備の時期において、この数年間は、若いモースドルフにとって、また、その他の小市民的＝民主主義的勢力、自由主義的勢力、そして、改革を準備しつつある市民的・貴族的勢力にとって、重要な試金石となった。

1822年6月にモースドルフはザクセンに帰国し、翌年の復活祭までドレスデンの両親の家にとどまっていた。彼はこの時、哲学者で数学者のカルル・クリスティアン・クラウゼ (Carl Christian Krause<sup>[7]</sup>) および国王の侍医カルル・グスタフ・カールス (Carl Gustav Carus<sup>[8]</sup>) と知り合った。カールスは後年、回想録の中で、若いモースドルフを「聡明で才能のある人<sup>[8]</sup>」と記している。

モースドルフは父親の勧めに従ってライプツィヒ [大学] に戻り、1824年に法学部の [卒業] 試験に合格した。しかし、「ジャコバン派」として有名であった彼は、国家官吏には任用されなかった。結局、自由派として知られる、ドレスデンの弁護士クンツェ (Kunze) 博士が彼を受け入れたが、1827年になると、彼はドレスデンに自分の弁護士事務所を開設した。彼の事務所には、零細な手工業親方、雇職人、貧しい市民がやって来た。モースドルフは、しばしば報酬を取らないで、彼らの法律問題に助言を与えた。この結果として彼はこれらの社会層の困窮を十分に知った。彼の友人たちは、モースドルフが、市民的権利と自由の、情熱的な、しかも、洗練された擁護者であり、時代の出来事を注意深く追い続け、歴史、地理および諸言語を熱心に勉強したと、調査報告書において一致して述べている。

1830—31年にフランス七月革命の影響の下にドイツ諸邦のいくつかでは、

民衆の反封建的騒擾が〔ドイツ〕農民戦争と同等の規模に達したが、諸邦の中でザクセン王国は、1830年9月に民衆の自然発生的な憤激が封建官僚制的支配体制に対する革命的な襲撃にまで拡大した、ドイツ最初の邦であった<sup>(9)</sup>。市民層も反対派陣営に転換した時、国王と政府は、ザクセンでも市民的改革によって資本主義への道を開けざるをえないことを了解した。しかし、ドレーズデンには、民主主義の選択を擁護する勢力も形成された。彼らは1830年12月初めに「市民協会」を結成した<sup>(10)</sup>。これは、当時のドイツ諸邦のすべての民衆運動の中で、小市民的で、急進民主主義的な政治組織結成の試みとして、現在までに知られている最初のものであった。現存支配体制の急進的変革のために闘争する、組織された民主主義的運動の萌芽形態が、著名な理論的指導者となっていたモースドルフの影響の下で、「市民協会」として、形成されたのである。市民協会の政治綱領となったのは、モースドルフの執筆した急進民主主義的な憲法草案で、それは、『ザクセン国民の希望する憲法』という、特徴的な標題を持っていた<sup>(11)</sup>。

1831年4月初めに2,000部が印刷・販売されたこの草案を、ヘルムート・クレッチェマル<sup>(9)</sup>は、「〔ザクセンの〕国土と国民性にまったく根ざしていない、国際民主主義的な精神のつくり物<sup>(12)</sup>」と片付けている。しかし、この草案は、西ヨーロッパの進歩的な経験に学び、国民主権の原理に基づいて、将来におけるドイツの国民的統一を意識して作成された、急進民主主義的な綱領であって、それが実現すれば、ザクセンは、中央権力機関としての国民代表を持つ立憲君主制の形態で、徹底的なブルジョア国家に転換したであろう。

法の下でのすべての国民の同権が最高の原則であった。貴族階級、その称号と諸特権は永久に廃止されるべきであった。この憲法草案は他の市民的権利とともに、人身、所有、宗教、出版、言論、表現、そして、集会の自由を承認した。国家権力に対する教会の介入は禁止され、聖職者による学校の監視は廃止された。絶対主義の権力機構としての常備軍は解体され、国民軍、

すなわち、護民団がそれに替わるべきであった。ドイツ連盟の諸決議の中の、この憲法と矛盾する、反動的なものをザクセンで施行することは、反逆罪と宣告された<sup>(13)</sup>。

この革命的綱領を実現するための最も重要な勢力として、モースドルフは、1830年9月以来王政に反抗的である民兵団を考えた<sup>(14)</sup>。そのために民兵団は、武装した国民闘争組織に転換されるべきであった。これを証明するのが、モースドルフが執筆し、1831年3月に市民協会が非合法的に配布した小冊子、『民兵団の現状と、あるべき姿<sup>(15)</sup>』である。(おそらくこの標題は、ヴィルヘルム・ヴァイトリンクが1838年にパリで出版した、正義者同盟の綱領文書<sup>(10)</sup>と関連する。なぜなら、ヴァイトリンクはライプツィヒに滞在した後、ドレスデンで働き、モースドルフのこの出版物を知っていたことは明白であるからである。)

このように根本的な国家改造は市民革命の勝利の結果としてのみ強行されるけれども、また、モースドルフの『憲法』は1831年の具体的状況の中では、客観的に見て、身分制議会に提出された〔政府の〕憲法草案の欠陥を提示したにすぎないけれども、リンデナウ政府は、その国家改革計画にとっての潜在的危険が、国民の急進的勢力を組織する中心的指導部の存在によって、発生したことを認識し、1831年4月に軍勢力を投入して市民協会を粉碎した<sup>(16)</sup>。〔市民〕協会の政治的指導者であるモースドルフは逮捕され、「首謀者および反逆者」としてケーニヒシュタイン要塞における15年の重禁固刑の判決を受けた。彼はこの要塞で1833年11月13日の夜から14日の未明の間に、不可解な方法で死んだ。31歳になったばかりであった。当時の監視兵の一人で、後に民衆詩人、1848年革命の際には決然とした民主主義者となったカルル・リヒター＝ローゼン (Carl Richter-Rosen<sup>(11)</sup>) (〔東ザクセン〕ビショフスヴェルダ市近郊グロスレールスドルフ村出身) は、誰かがモースドルフを殺害した、との信頼できる見解を三月前期に主張していた<sup>(17)</sup>。僅かに残されている調査文書も、この見解の正しさを証明している。ギリシアで一緒に

戦った、モースドルフの友人の一人、民主主義的な画家で作家のハロ・パウル・ハリック (Harro Paul Harring<sup>[12]</sup>) は、1830—31年のポーランドの国民的蜂起に参加したためにザクセンから追放されたが、彼は、[1831年に]ライプツィヒで出版された悲歌、『ドレスデンの謀反の首領ベルンハルト・モースドルフ』を彼に捧げた。その中でハリックは次のように書いている。「君が望んだものは、将来、光の中で輝くだろう。……友人の挨拶を君の鎖の中で受けよ。多くのドイツ人が私とともに君に挨拶を送る。……<sup>[18]</sup>」。

市民協会の粉碎によって、ザクセンにおける封建制の貴族的=自由主義的な廃止の道にある最後の障害が取り払われた。この廃止はとりわけ1831年9月4日の憲法——これは、多くの欠陥があるにもかかわらず、ザクセンの時代遅れの国家制度にとっては一大進歩を意味していた。——、1832年のブルジョア的な都市自治体法と土地改革法であった。今や政治的な地滑りが始まり、一層の改革が実施された。ザクセンで市民的改革の過程が開始されたのである。そして、これを決定的に促進したのは、ベルンハルト・モースドルフを取り巻く急進民主主義者たちの徹底的で勇敢な活動であった。

憲法、都市自治体法と土地改革法に続いて、多くの改革措置が、国家行政、財政、司法・軍隊・教育制度の領域において、また、内政上の他の領域において、30年代に実施された。基本的傾向として市民的な、そして、その作用において進歩的な改革措置が、これほど集中的に施行されたのは、19世紀のザクセン以外に歴史上ない。

注

- (1) Vgl. Zwahr 1984, S. 97 ff.
- (2) Vgl. Czok 1989, S. 297 ff.
- (3) Vgl. Kowalski 1983, S. 9-16; Steiger 1981, S. 97; STAD, GK, Loc. 3453.
- (4) Vgl. Peters 1970.
- (5) Vgl. Steiger 1981, S. 97; Kowalski 1983, S. 14 f.
- (6) ベルンハルト・モースドルフについては Vgl. Ruhland 1981, S. 123 ff.; STAD,

- OLG, Nr. 85, 126, 138, 250, 252, 286, 292; Groß 1985, S. 6.  
 (7) Vgl. Hottenroth 1927, S. 25 f.; Friedrich 1985, S. 102-106.  
 (8) Carus 1866, S. 357.  
 (9) Vgl. Ruhland 1981, S. 43 ff.  
 (10) Vgl. Ruhland 1983 (a), S. 45 ff.  
 (11) Vgl. Ruhland 1983 (b), S. 45 ff.  
 (12) Kretzschmar 1935, S. 148.  
 (13) Vgl. Moßdorf 1831 (STAD, OLG, Nr. 134 に含まれる.).  
 (14) Vgl. Ruhland 1987, S. 55 ff.  
 (15) Kommunalgarde 1831 (STAD, OLG, Nr. 138 に含まれる.).  
 (16) Vgl. Ruhland 1983 (c), S. 16 ff.  
 (17) Vgl. Richter-Rosen 1848 (STAD, OLG, Nr. 292 に含まれる.).  
 (18) Harring 1831.

## (訳注)

- [1] カルボナリは秘密結社カルボネリア (Carboneria) の会員を指す。  
 [2] フォレンは詩人・政治家 (1796-1840)。  
 [3] これは1543年にザクセン公 (1547年から選帝侯) モーリッツによって創設された。聖  
 アフラ高等学校の前身。  
 [4] これは、12世紀に十字架教会の聖歌隊員養成機関として創設され、その後、読み・書  
 き・宗教を教えるようになり、1539年にザクセン公ハインリヒ (敬虔公) によってド  
 レースデン市参事会に譲渡された。クロイツ高等学校の前身。  
 [5] クルーク (1770-1842)。  
 [6] アレクサンドロス・イプシランティ・ジュニア (1792-1828)。  
 [7] クラウゼ (1781-1832)。  
 [8] カールスは医師で画家 (1789-1869)。  
 [9] クレッチェマルはザクセン史の大家 (1893-1965)。  
 [10] *Die Menschheit, wie sie ist und sein sollte*, [Paris] 1838.  
 [11] カルル・フリードリヒ・リヒター (筆名カルル・ローゼン。生没年不明) は、モー  
 ドルフにかかわる官憲侮辱事件について1849年1月に起訴され、同年11月に禁固3週  
 間と裁判費用の支払いを判決された。Groß 1985, S. 71。  
 [12] ハロ・ハリング (1798-1870) の詩は、GV 1700-1910, Bd. 56, S. 118 によれば、  
*Elegie an Bernhard Moßdorf als Haupt der Verschöpfung zu Dresden verhaftet*, o.  
 O. (1831)。